シンポジウム | 川崎病

シンポジウム07（ III-S07）
川崎病「新しい日本のガイドラインが目指すもの」

座長:髙橋 啓（東邦大学医療センター大橋病院 病理診断科）
座長:小林 徹（国立成育医療研究センター 臨床研究センター企画運営部）
2020年11月24日(火) 08:30 ～ 11:00 Track3

[III-S07-4]川崎病冠動脈障害に対するステント治療に関する考察

○津田 悦子（国立循環器病研究センター）

キーワード：川崎病，経皮的冠動脈形成術，冠動脈ステント

（背景）冠動脈障害を有していても無症状であった川崎病既往患者が40－50歳代となり、急性冠症候群（ACS)を発症し、経皮的冠動脈形成術(PCI)を受ける機会が増加してきた。粥状硬化による ACSでは、 Primary stent治療が一般的であるが、最近 stent free PCIも選択肢の１つとして考えられつつある。川崎病冠動脈障害の患者におけるステント留置術については、必ずしもコンセンサスが得られているわけではない。（目的）川崎病冠動脈障害に対するステント留置後の転帰を明らかにする。（方法）1997年から2019年までにステント治療が施行された文献報告33症例（34枝 Primary stent 7、 待機的 PCI 14、慢性完全閉塞9、 Covered stent 4）について、その転帰について検討した。（結果）施行時年齢は、5－48歳（中央値17歳)で、標的血管は LAD 18 RCA 13 LCX 1 LMT１であった。 ACSに対して Primary stent は7例に施行され、遠隔期に3例に冠動脈バイパス術(CABG)、1例に re-PCIが施行されていた。待機的 PCIでの stent留置は14例で、遠隔期に2例に CABGが、1例に re-PCI、1例に心臓移植が施行されていた。慢性完全閉塞(CTO)に対して9枝に施行され、遠隔期に re-PCIが2枝に施行されていた。 Covered stent は4例に施行され、遠隔期閉塞2例、開存2例であった。遠隔期の冠動脈造影は28枝に施行され、 adverse effectは19枝(68%)に見られた。完全閉塞9枝、再狭窄10枝であった。ステント留置後に見られた新生瘤は7例（37%)に合併しており、薬剤溶出ステントに多く見られた。ステントの開存は１年以内7枝、5年以上開存の報告は1枝であった。（考察）報告症例数は少数で限られるが、ステント留置術は必ずしも良好なものではないことが推察される。この患者群の対象年齢は若年であるため、標的血管の長期的な開存が必要となる。ステント留置の選択については熟考すべきである。

©特定非営利活動法人 日本小児循環器学会